

令和元年度 方部出張型政策研究会

活動報告書

公益財団法人ふくしま自治研修センター

政策支援部

令和2年3月

目 次

1. はじめに (P2～)
2. 方部出張型政策研究会について (P4～)
3. 提案施策 (P6～)
 - (1) 「集まれ！けんなん大家族！」
～県南地域の特色を活かし助け合う暮らし～
 - (2) 【県南地方版】 ワイルド・ツーリズム・プロジェクト
～野生との分断から共生へ～
4. 施策提案書 (P63～)
5. 研究会活動経過 (P68～)

1. はじめに

我が国は、長期にわたる少子化によって、本格的な人口減少を迎えようとしています。総人口は、約10年前（2008年）の1億2,808万人をピークに減少し始め、国立社会保障・人口問題研究所の出生中位・死亡中位推計（平成29年推計）によれば、2040年には、1億1,092万人となると見込まれています。

国、各自治体は、「まち・ひと・しごと総合戦略」を策定し、対策を進めていますが、人口減少は避けることができません。

人口減少が深刻化し、高齢化がピークを迎えるといわれている2040年。

就業者人口が減り、各分野における担い手が不足していく一方、介護施設の需要の増加、医療需要の増加など、様々な課題が待ち受けています。

しかしながら、悲観的な将来ばかりではありません。AI、IoT化など、日々技術革新が目まぐるしく進展していますし、個人重視だった社会が見直されてきています。

総務省の有識者委員会「自治体戦略2040構想研究会」の報告によりますと、これから直面するであろう様々な課題について、過去のからの延長戦で対応策を議論するのではなく、将来の危機とその危機を克服する姿を想定した上で、現時点から取り組むべき課題を整理する、いわゆる「バックキャストिंग」による課題の整理が必要とされています。

令和元年度方部出張型政策研究会では「人口減少・少子高齢化が進み、自治体職員も減少する中であっても、地域に必要とされる行政サービスを提供し、行政経営が可能となる自治体の在り方を考える」をテーマに、将来予測されるトレンドを制約として受け入れつつ、将来のあるべき姿から逆算して、今から取り組むべき課題を設定する「バックキャスト思考」を取り入れ、福島県県南方部を調査研究対象地域として、研究会の活動を行いました。

研究員の政策形成能力の向上のため、政策形成のプロセスを重視し、さらには、「バックキャスト思考」という新たな手法を取り入れ、今後、様々な制約が想定される中、県南地域における持続可能で心豊かな暮らしはどのような暮らしか、その暮らしを実現するためには社会はどうなっている必要があるか、行政の役割、在り方はどのようなものか、について、約8か月間検討を重ねてきました。

令和元年度の研究会は、当初12名の研究員の参加により、2グループに分かれてスタートしました。その後、残念ながら、業務都合等により、9名での活動となりましたが、計7回の研究会の活動を行いました。

研究会では、東京都市大学教授の古川柳蔵氏に御指導いただき、前半の活動で「バックキャスト思考」の理解を深め、後半の活動では、その手法を課題設定のプロセスに取り入れ、議論や施策の検討を重ねました。

各グループごとに、様々な制約がある中であっても、県南地域における心豊かな将来像を描き、それを実現するため、提案する施策を練り上げました。

令和2年2月7日には、研究成果の報告会を開催し、これまでの活動の成果を発表しました。また、これまでの研究会の活動で御指導をいただきました古川柳蔵教授をはじめ、御出席いただきました来賓の方々と「県南らしい地域づくりの在り方を考える」をテーマに意見交換を行い、今後の地域づくりに必要となる観点について、貴重なお話をお伺いいたしました。

この報告書は、政策研究会の活動の記録をはじめ、御指導いただいた古川教授の講義内容、昔の県南地域における暮らしについてお伺いさせていただいた地域の方々のお話などをまとめたものです。

報告書を読まれたみなさまの今後の業務等の参考になれば幸いです。

2. 方部出張型政策研究会について

1 方部出張型政策研究会とは

ふくしま自治研修センターでは、平成24年度より、県内自治体職員の政策形成能力向上に寄与することを目的に、特定の地域課題をテーマに自治体等から集まった職員が少人数のグループワーク形式で専門家を招いての勉強会や事例調査研究等を通じて、課題に関する知識・理解を深め、解決に向けた政策等を提言する「政策研究会」の活動を行っています。

令和元年度は、「フィールド自治体型（成果・提言重視型）」、「方部出張型（調査研究重視型）」の二つのタイプで研究会を実施しました。

方部出張型政策研究会は、当センターで活動するには、物理的距離が遠く、研究会へ参加の負担が大きいとされる地域へ政策支援部の職員が出張して実施する研究会です。

また、テーマへの問題意識を喚起し、知識・理解を深めることにも重点を置くなど、政策調査研究のプロセスを重視しての活動を行うものです。

令和元年度は、調査対象地域を「福島県県南方部」とし、活動を行ってきました。

2 県南方部について

県南方部は、福島県の南部に位置し、首都圏と隣接する地理的優位性を持っており、製造業を中心に企業が立地する地域です。

一方、阿武隈川、久慈川などの源流を有し、豊かな自然に恵まれており、農業が盛んな地域でもあります。

3 令和元年度研究テーマ

「人口減少・少子高齢化が進み、自治体職員も減少する中であっても、地域に必要とされる行政サービスを提供し、行政経営が可能となる自治体の在り方を考える」

4 研究会の取組みについて

人口減少が深刻化し、高齢者人口がピークを迎える2040年。本格的な人口減少と高齢化を迎える中、様々な問題が起きてくることが考えられます。

担い手不足の深刻化による様々な問題、環境の変化など多くの制約が生じることが予想されます。

令和元年度の政策研究会では、「様々な制約を受け入れたうえで描く心豊かな県南地域の将来像とはどんなものか。新しい価値を持った県南らしいライフスタイルはどのようなものか。それを実現するために、今から取り組むべき課題は何か。自治体職員も減少する中、行政の役割はどのようなものか。」について考えました。

また、今回の研究会では、従来の「フォアキャスト思考（現状分析から課題を洗い出し、解決策を考える）」ではなく、「バックキャスト思考（制約を肯定した将来像から取り組むべき課題と対策を考える）」の手法を学ぶとともに、課題設定へのプロセスに取り入れ研究を行いました。

バックキャスト思考を理解するうえで、講師の先生から講義をしていただいたり、制約の多かった時代に心豊かに生きてきた高齢者の方々からお話をお伺いし、先人の知恵や仕組みを取り入れたりしながら、持続可能で心豊かな暮らしの在り方を考え、暮らしの実現のための施策の提案に取り組みました。

3. 提案施策

各グループの提案施策は以下のとおりです。

A グループ：「集まれ！けんなん大家族！」

～県南地域の特色を活かし助け合う暮らし～

概要： 2040年になると、少子高齢化による人手不足はより顕著になる。また、資源・エネルギーが高騰し、人やモノが不足する時代になることが予想される。現在のような便利な暮らしを続けていくことが非常に困難になる。我々はこれらを避けては通れない制約として受け入れ、その環境下においても県南地区の人々が心豊かに暮らせるライフスタイルを提案する。題して「集まれ！けんなん大家族！」～県南地域の特色を活かし助け合う暮らし～である。県南地区の特徴でもある「首都圏からの近さ」、「製造業が多く立地している」、「自然（山林）が豊富」といった点に着目し、「首都圏とのつながり」、「自然とのつながり」、「世代間のつながり」の3つのつながりを作り、それぞれが助け合う暮らしを実現していく。行政はそのきっかけ作りの役割を担う。

「首都圏とのつながり」では、首都圏で働く、県南出身者とのつながりを持ち続け、彼らに情報発信することで、地元に戻って働く、地元企業と共同で仕事を等、形のある郷土愛という心の豊かさを生む。

「自然とのつながり」では、豊かな自然を守るため、林業に従事する川上（県南地区）と漁業に従事する川下（浜通り地区）がつながりを持ち、環境保全活動を山と海でそれぞれ行うことで、自然の恵みを守り育て、享受する心の豊かさを生む。

「世代間のつながり」では、地域の高齢者世代が、働く世代や子育て世代とのつながりを持ち、企業や子育ての場での社会的役割を担うことで、高齢者の生きがい、また働く世代、子育て世代の安心感という心の豊かさを生む。

以上3つのつながりとそこから生まれる助け合いをキーワードにし、県南地区らしい心の豊かなライフスタイルを提案する。



左から リーダー 角田 淳史 (西郷村)
佐藤 裕太 (白河市)
黒須 賢嗣 (福島県)
宇佐見 純平 (鮫川村)
本柳 志織 (白河市)

Bグループ：【県南地方版】ワイルド・ツーリズム・プロジェクト

～野生との分断から共生へ～

概要：全国的にイノシシ及びシカ等の野生動物の頭数はこの30年間で大きく増加した。一方、鳥獣被害対策を担う狩猟免許所持者の人数は減少傾向にあるうえに高齢化が進んでおり、現状の対策を今後も維持するのは困難である。

現在の対策は、野生及び野生動物を「厄介もの」とみなし、人間の生活世界から駆除することを前提としている。だが、かつての人々は野生を脅威と感じながらも、その恵みを自らの生活に活かしていた。そのまなざしを参照して、野生及び野生動物を「豊かな恵みをもたらすもの」へと捉え直し、その恵みを自らの手で獲得するライフスタイルを浸透させる試みとして「ワイルド・ツーリズム」を提唱する。その実践のため、狩猟に係る高いハードルを緩和し、狩猟をより一般化してアウトドア感覚でもできるよう、野生の恵みを「獲得する・活かす・学ぶ」ことを総合的に支援する拠点として「ワイルド・ツーリズム・ベース」を整備し、現代的な「野生と共生する営み」を構築する。



左から
皆川 悟 (福島県)
リーダー 斎藤 朋也 (福島県)
阿久津 翔 (鮫川村)
水野谷 千春 (白河市)



集まれ！ けんなん大家族！ ～県南地域の特色を活かし助け合う暮らし～



A グループ

- ◎ 角田 淳史 (リーダー) (西郷村) ○ 宇佐見 純平 (鮫川村) ○ 黒須 賢嗣 (福島県) ○ 佐藤 裕太 (白河市) ○ 本柳 志織 (白河市)

将来(2040年)の制約

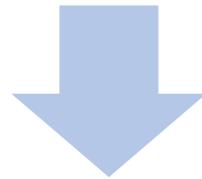
- **人口問題** …… 人口減少、少子高齢化 若者流出
- **資源問題** …… 資源、エネルギーの高騰

つまり…

ヒト ・ モノ が不足する時代

これらの制約の中で

心豊かに 生きていくためには…



新たなライフスタイルが必要

新しいライフスタイルのヒント

地域にあるものは・・・
(地域の魅力)

- ・首都圏に近い
- ・製造業が数多く立地
- ・豊かな自然(林業が盛ん)

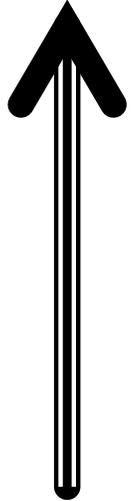
ヒト・モノがない時代は・・・
(90歳のヒアリング)

“助け合い”という
先人の知恵

ライフスタイルコンセプト

県南地域の特色を活かし助け合う暮らし

2040年



2020年

県南地域の特色を活かし
助け合う暮らし
理想のライフスタイル

バックキャスト

- ・他地域とのつながりが必要
- ・自然とのつながりが必要
- ・世代間のつながりが必要

だが...

- ・人口流出の増加
- ・利活用されない森林
- ・核家族化の進行

つながりをつくるために、
行政の支援(政策)が必要！



首都圏

政策がない(つながりが無い)と...

地元企業

県南出身者

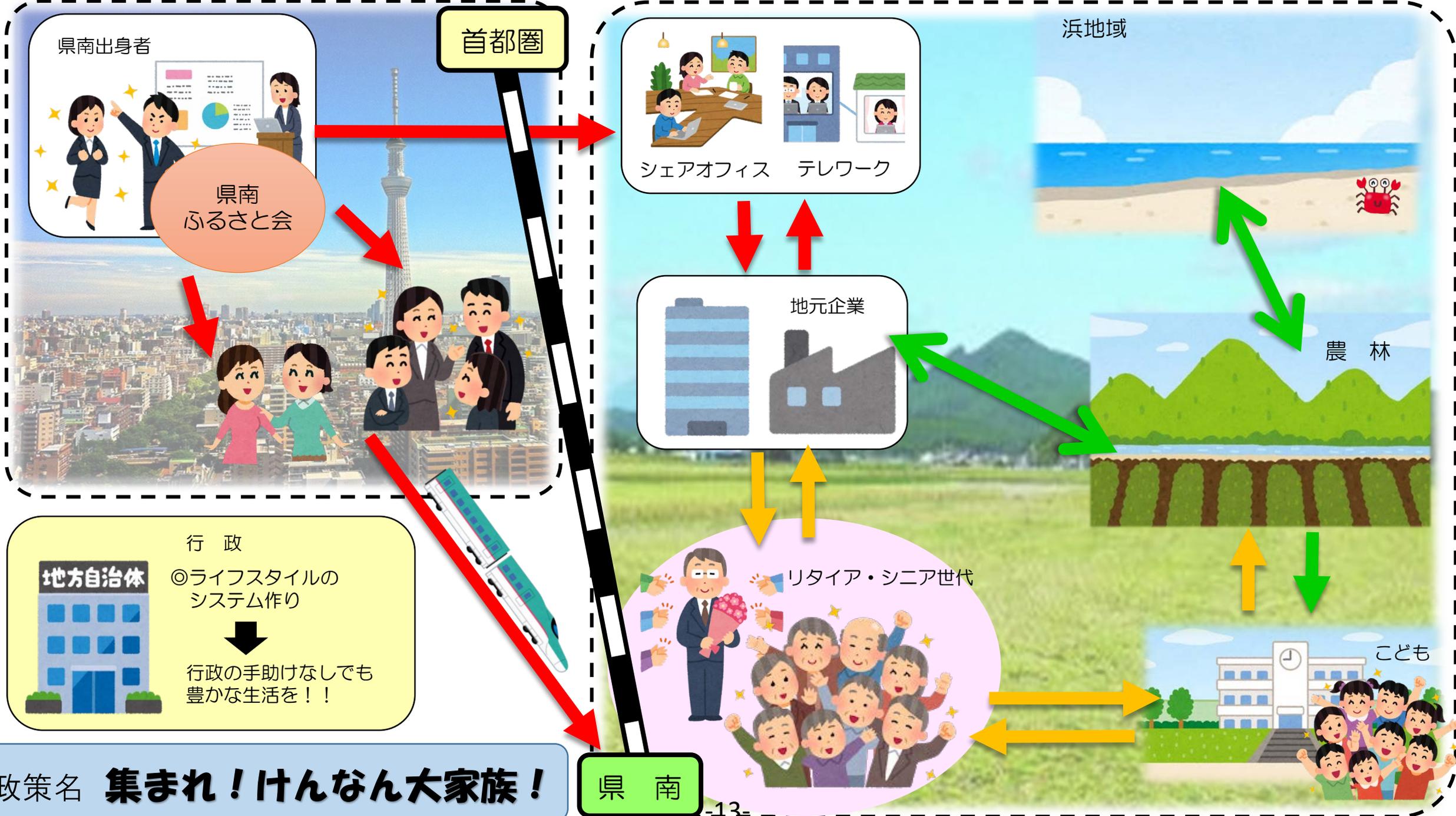


行政

地方自治体

税収がなく、何も出来ない...

県南



県南出身者

県南
ふるさと会

首都圏

シェアオフィス

テレワーク

浜地域

地元企業

農林

行政

地方自治体

◎ライフスタイルの
システム作り

行政の手助けなしでも
豊かな生活を！！

リタイア・シニア世代

こども

政策名 **集まれ！けんなん大家族！**

県南

集まれ！ けんなん大家族！ 3つの施策（つながり）

Dream come true 県南
～首都圏とのつながり～

森とともに生きる県南
～自然とのつながり～

生涯現役！ 県南地域の高齢者活躍創出
～世代間のつながり～

ライフスタイルの例 ～首都圏とのつながり～

「ままだおる」は
しっとりしてるから
カロリーゼロ!



上京した県南出身者の男性



んだい!!



県南ふるさと会
(数か月に1回)

資格やスキルの
マッチングの場!

空時間は地元で仕事♪



どーれ...

おかえり〜



白河の関にかかりて...



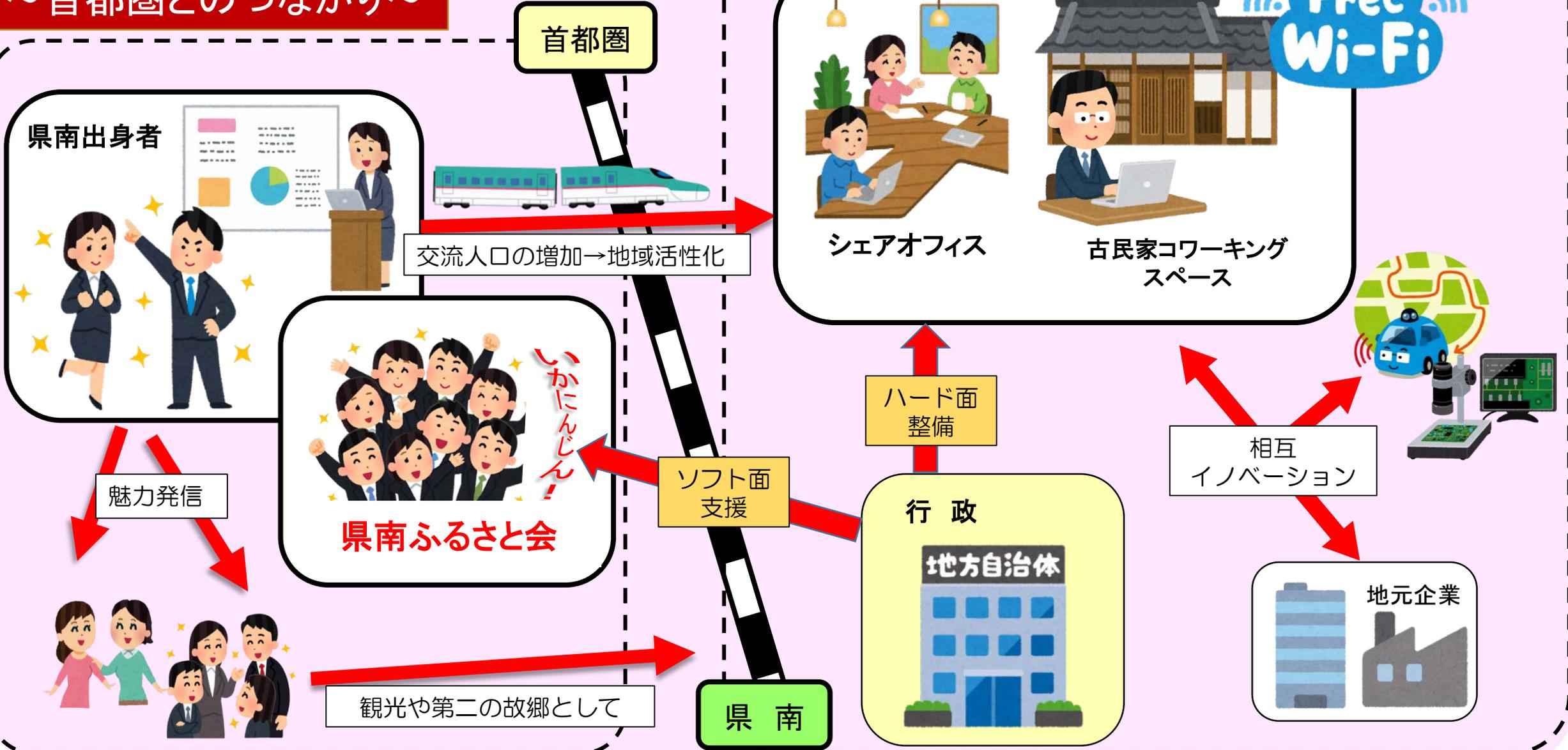
古民家コワーキングスペース



実家を思い出すな〜

よくこたつで勉強したっけ...

Dream come true 県南 ～首都圏とのつながり～



ライフスタイルの例 ～自然とのつながり～

★林業体験フェスタ★

林業体験イベント
(担い手育成)

海と山の繋がりをおいしく楽しく学ぼう！

林業体験フェスタに行ってきます！

海×山の交流ツアー
(新たな担い手創出)



小名浜

かわいい貝殻ないかしら…



お礼の海岸清掃



植樹祭

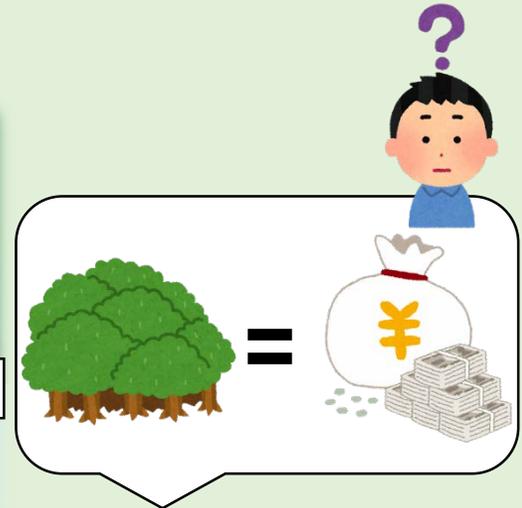
竹の活用

木工教室

林業実演コーナー

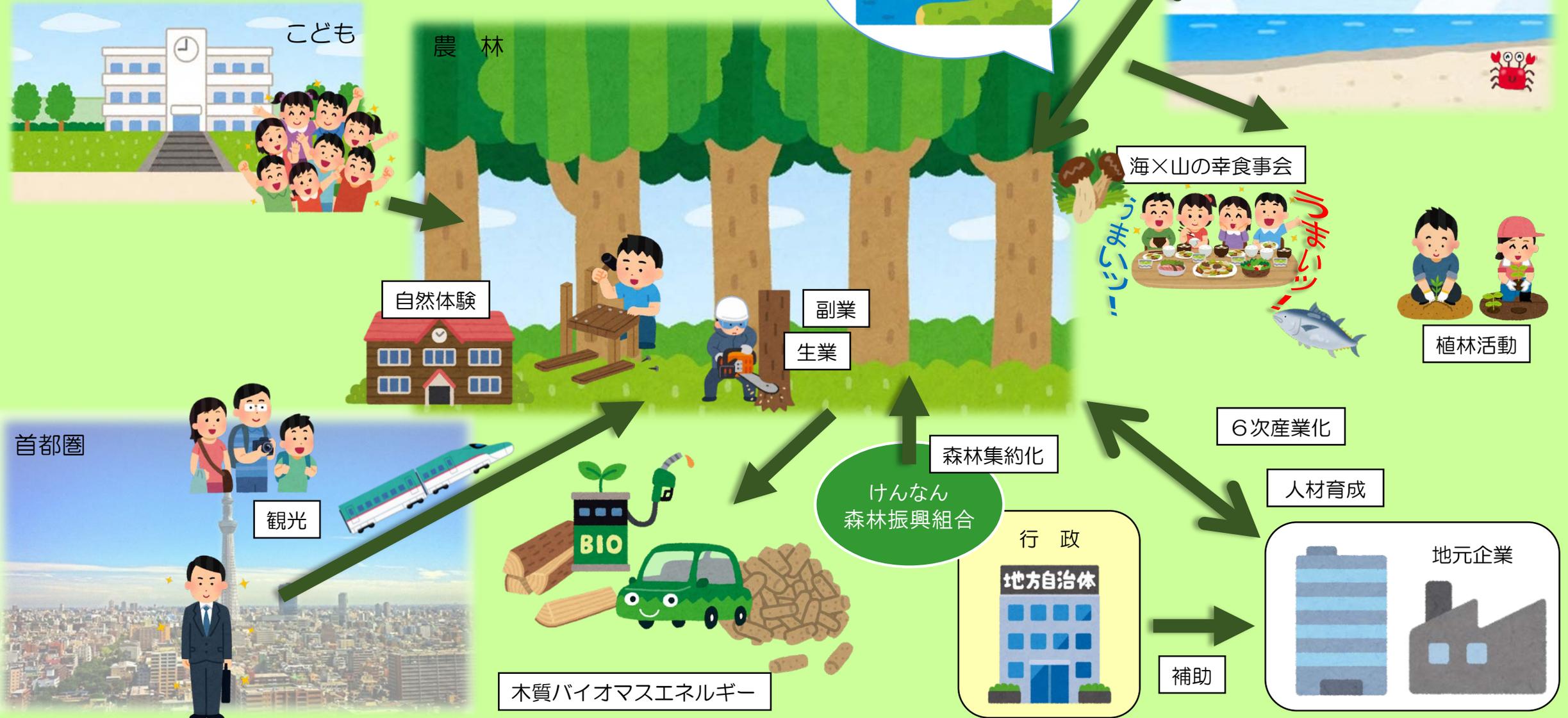
長〜い流しそうめん！

ギネス記録に載るかしら…

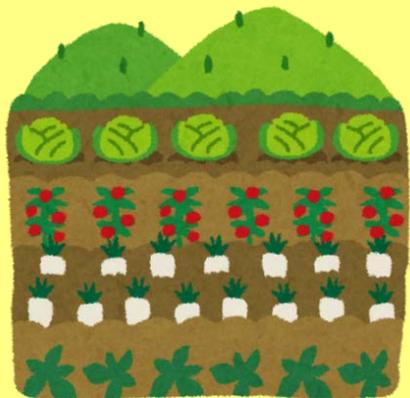


県南地域に住むとある男の子

森とともに生きる県南 ～自然とのつながり～



ライフスタイル例
～世代間のつながり～



野菜が消費しきれない！
もったいない！



もったいない！



苗も生きてもいる生きてもいる



…のじいちゃんのおばあちゃん

本当の「食育」は苗を植え、育てるとからはじまるのじゃ！

孫がたくさんいるみたいで
楽しいわね！

食育から生き物への感謝の気持
ちが生まれるのじゃ！

地域子育て食堂

こども食堂

防犯

食育



手料理を振舞いたいけど
場所がないわね…



あーんやんやん

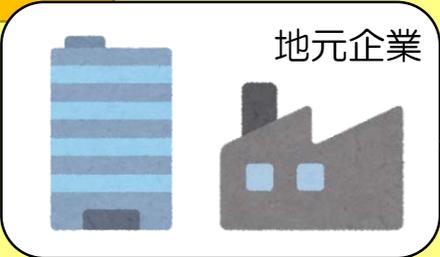
あーんやんやん

大勢で食べるごはんは美味しいね！

生涯現役！県南地域の高齢者活躍創出 ～世代間のつながり～



- 高齢者資格取得の補助
- 高齢者人材データベース整備
- 子育て現場への高齢者参入支援
- 空き家や耕作放棄地利活用



知識、技術、経験の継承

人手不足
解消

資格取得



労わる心

こどもの見守り



野菜栽培



施策がない(つながりがない)と・・・

首都圏

県南出身者

ストレス



地元企業



空き家の増加



行政

地方自治体

税収がなく、何も出来ない・・・



独居老人
孤独死



待機児童
寂しい子ども

保育所



県南



県南出身者

首都圏

浜地域

形ある
郷土愛

自然との
共生

生きがい

シェアオフィス テレワーク

新たな
つながり

有効活用

地元企業

6次化

農 林

技術継承

サポート

リタ

体験学習

こども

介護予防

県南

政策名 **集まれ！けんなん大家族！**

行政

地方自治体

◎ライフスタイルの
システム作り

行政の手助けなしでも
豊かな生活を！！

自然体験ツアー

働く場

県南地方版 ワイルド・ツーリズム・ プロジェクト

～野生との分断から共生へ～

【Bグループ】

◆福島県：斎藤 朋也

◆白河市：水野谷 千春

◆福島県：皆川 悟

◆鮫川村：阿久津 翔

①止まない被害……

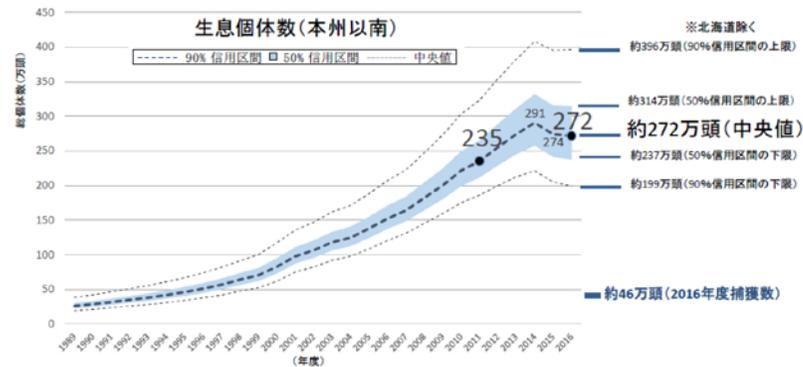


②増えている野生動物【1】

全国的に、野生のニホンジカ、イノシシの頭数はこの30年間で大きく増加（シカは約10倍、イノシシは約3倍）！国や自治体の施策で歯止めがかかってはいるものの、今後も高い水準で推移すると予想されている。

個体数推定の結果（ニホンジカ）

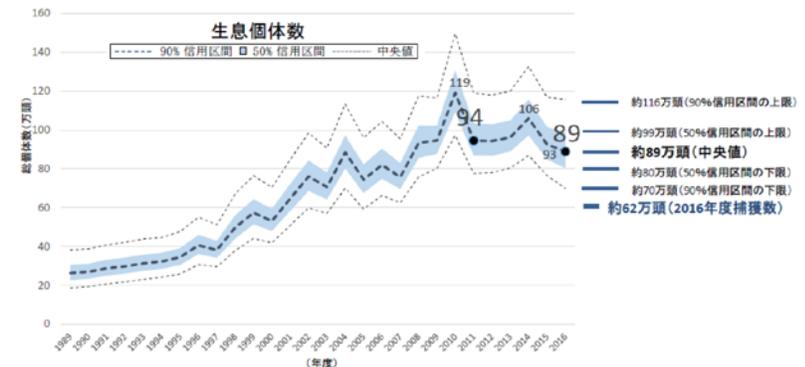
平成元(1989)～平成28(2016)年度の捕獲数等から全国の個体数推定を行ったところ、全国のニホンジカ（本州以南）の個体数は、中央値で約272万頭（平成28(2016)年度末）となった。



※平成28(2016)年度の自然増加率の推定値は中央値1.16(90%信用区間:1.08-1.25)
(参考)平成28(2016)年度の北海道の推定個体数は約47~55万頭(北海道資料)

個体数推定の結果（イノシシ）

平成元(1989)～平成28(2016)年度の捕獲数等から全国の個体数推定を行ったところ、全国のイノシシの個体数は、中央値で約89万頭（平成28(2016)年度末）となった。

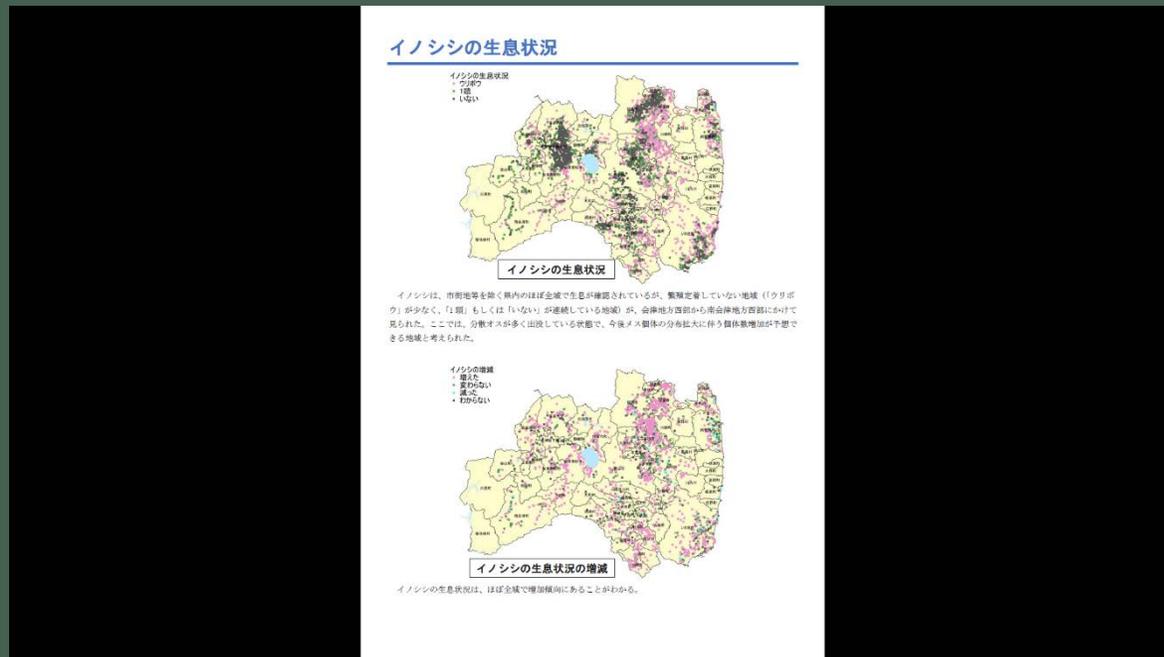


※平成28(2016)年度の自然増加率の推定値は中央値1.64(90%信用区間:1.46-1.79)

【出典】全国のニホンジカ及びイノシシの個体数推定等の結果について（平成30年度）
平成30年10月環境省自然環境局野生生物課鳥獣保護管理室作成 HPアドレス：<https://www.env.go.jp/press/files/jp/110043.pdf>

②増えている野生動物【2】

福島県及び県南地域においても、特にイノシシは増加傾向にある。



※下の地図ピンク色の地域が増えた地域。県南はほぼ全域。

※鮫川村におけるイノシシによる水田被害の写真

【出典】平成30年度鳥獣被害対策に係る集落アンケート調査結果について
福島県農林水産部環境保全農業課作成 HPアドレス：<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/323214.pdf>

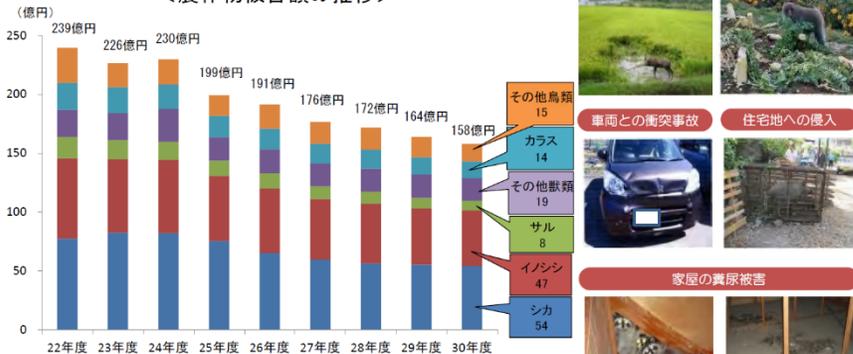
③被害は抑えているが、猟師は高齢化&減少傾向

農作物への被害は、対策が進んだこともあって平成22年度の239億円から平成30年度の158億円まで減。一方、狩猟免許所持者は昭和50年度の51.8万人をピークに、平成12年度以降は20万人前後を推移しているが、60歳以上の高齢者が大半を占めている。

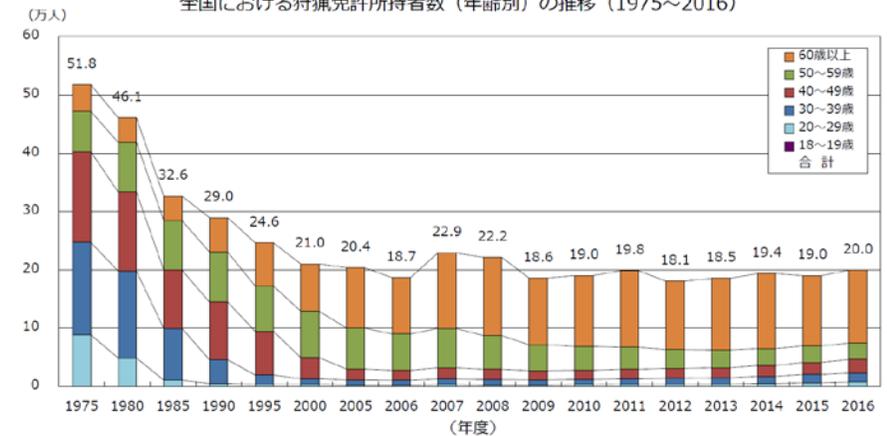
野生鳥獣による農林水産被害の概要

- 野生鳥獣による農作物被害額は158億円(平成30年度)。全体の約7割がシカ、イノシシ、サル。
- 森林の被害面積は全国で年間約6千ha(平成29年度)で、このうちシカによる被害が約3/4を占める。
- 水産被害としては、河川・湖沼ではカワウによるアユ等の捕食、海面ではトドによる漁具の破損等が深刻。
- 鳥獣被害は営農意欲の減退、耕作放棄・離農の増加、さらには森林の下層植生の消失等による土壌流出、希少植物の食害、車両との衝突事故等の被害ももたらしており、被害額として数字に表れる以上に農山漁村に深刻な影響を及ぼしている。

<農作物被害額の推移>



全国における狩猟免許所持者数(年齢別)の推移(1975~2016)

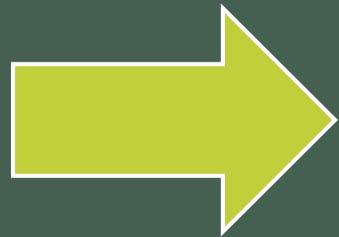


【出典】野生鳥獣のジビエ利用を巡る最近の状況
令和元年12月 農林水産省農村振興局作成
HPアドレス : <https://www.maff.go.jp/j/nousin/gibier/attach/pdf/suishin-104.pdf>

【出典】年齢別狩猟免許所持者数
環境省自然環境局野生生物課鳥獣保護管理室作成
HPアドレス : <https://www.env.go.jp/nature/choju/docs/docs4/nenreibetu.pdf>

④将来的な農村部の鳥獣被害はどうか…？

- I イノシシ&シカ等の野生動物の増加・・・
- II 狩猟免許所持者の高齢化&減少・・・
- III 少子高齢化による人口減・・・



鳥獣被害の増加？！
地域農業の衰退？！



⑤ 「フォアキャスト」な発想では限界！！



◆将来的に、人口をはじめ様々な資源・資金が減少・不足すると見込まれる。
⇒鳥獣被害対策による「現状維持」あるいは「現状路線の拡大」もはや困難！



発想と価値観の転換を！

⑥昔の人々は野生とどう向き合っていたか？【1】

各地に残る、野山を舞台とする民話。

千晩が嶽は山中に沼あり。この谷は物すごく腥き臭のする所にて、この山に入り帰りたる者はまことに少なし。

「遠野物語」32話より

遠野の町と猿が石川を隔つる向山といふ山より…少し上の山に入り…ふと大なる岩の陰に赤き顔の男と女とが立ちて何か話をしてゐるに出逢ひたり。…事のさまより真の人間にてはあるまじと思ひながら…戯れてやらんと腰なる切刃を抜き、打ちかかるやうにしたれば、その色赤き男は足を挙げて蹴たるかと思ひしが、たちまちに前後を知らず。…三日ほどの間病みてみまかりたり。…山の神たちの遊べる所を邪魔したゆゑ、その祟りをうけて死したるなり…。

「遠野物語」91話より



【出典】佐脇嵩之『百怪図巻』より「山うへ」

⑥昔の人々は野生とどう向き合っていたか？【1】

各地に残る、野山を舞台とする民話。

私の住宅の裏はすぐ10軒くらい藪なんです。その藪の中にカラスが1万羽もいたかっていうほど。その大将のカラスが声をかけると、全部のカラスが、竹にとまって眠ってたカラスが、わさわさわさわさって羽音を立てて、起きたんです。そして、なぜだかどこに行くんだか、いやあ、それがいっぱい1万匹くらい。空は真っ暗ですから。…そうして南の方に飛んでいったんです。で、あのカラスが夕方時間になると戻ってきて、また藪に寝る。その大群のカラスはどこにいったんだらう。誰も知る人いないの。終戦後1匹もいなくなっちゃったの。そういう不思議な実話なんです。どこにいったんでしょう。

旧信夫村 岡崎りい子氏からのヒアリングより



【出典】佐脇嵩之『百怪図巻』より「山うへ」

人知が及ばないほどの「深遠な力」を湛えている神秘的かつ幽玄な領域。

⑥昔の人々は野生とどう向き合っていたか？【2】

各地域に野生動物を狩る「マタギ」等の狩猟者や炭焼き職人、木樵等、野山に交じって生きる人々がいた。

※旧大信村にも「熊撃ち名人」がいた！



【出典】新庄デジタルアーカイブ
マタギ装束（大正6年）HPアドレス：
<https://www.shinjo-archive.jp/2017150066-2/>

野生の「深遠な力」は、人間にとって脅威でもあったが、同時に豊かな「**恵み**」の源泉でもあった。



人間は「野生の世界」を畏れ敬いながら、その豊かさを取り込んで生活しており、双方の世界は入り交じっていた。

⑦ 「野生」から離れていく人間社会【1】

しかし、近代化により野生から得ていた生活必需品のほとんどが工業製品等で代替可能に。また「畏れ」の感覚は「迷信」に。



⑦「野生」から離れていく人間社会【1】

しかし、近代化により野生から得ていた生活必需品のほとんどが工業製品等で代替可能に。また「畏れ」の感覚は「迷信」に。



「野生に対するまなざし」に変化！

⑦ 「野生」から離れていく人間社会【2】

◆ かつての「野生」

人知が及ばない深遠な力を湛え、それは人間にとって脅威にもなりうるが、同時に得難い恵みにもなる⇒「**畏怖と崇敬の対象**」



しかし現代では…

災害や獣害の原因であり、人間の生活世界を快適に保つために管理・制御しなければならない⇒「**厄介もの**」

「人間の生活世界」と「野生の世界」が分断！

⑧ 「野生との分断」から「野生との共生」へ

「イノシシ・シカ等の野生動物の増加」という現象を捉える「思考法」や「価値観」を、昔の「まなざし」を参照して変えてみる。

分断的思考法

- ◆農作物に被害をもたらす厄介ごと。
- ◆人間が制御し、管理しなければならない。
- ◆人間の生活世界から「駆除」しなければならない。



共生的思考法

- ◆被害と同時に恵みももたらす。
- ◆人間が制御しきれないほどの豊かさを湛えている。
- ◆人間の生活に上手に取り込み、その恵みを享受すべく工夫する。

「好ましくない状況を好ましい状況に変えるため、好ましくない状況と対決（対策）する」という発想から「好ましくない状況を受け入れ、活かす方策を見いだす」方向（バックキャスト）へのシフト。

⑨「ワイルドツーリズム」の提案①

◆ワイルドツーリズムとは…

野生の脅威との向き合い方と野生の恵みの豊かさとその活かし方を学び、野生との共生を実践する試み。

◆現状では、野生への関わり方は2層に「分断」

★ハンター等、実際に野山に交じって野生からの恵みを獲得する人々（ヘビー層）

★ジビエを食べる等、野生からの恵みを「消費」する人々（ライト層）



「野生の世界」と「人間の生活世界」の分断と二重写し！

⑩ 共生実践への高いハードル

◆ 日本では狩猟に対するネガティブイメージが強い . . .



専門的な知識とか技術とか必要でしょ？
素人には難しいよ。

免許とかの制度が
複雑で面倒だし、お金
もかかるって聞いたぞ

狩猟って、獣害対策
とか仕事として
やることでしょ？

動物のいのちを
奪うのはちょっと
抵抗が...

3K（きつい・
きたない・きけ
ん）そうだし、
女性には無理よね

※日本におけるハ
ンターの女性の割
合は1%未満！

⑪海外（ヨーロッパ）における狩猟

◆趣味・スポーツ・社交行事と多様な側面をもっている。

- ・ 狩猟の「ネガティブさ」は本質的なものではない！
- ・ ワイルドツーリズムで新しい狩猟のスタイルを！



FACE 狩猟に対する態度に対する4つのモデル

北欧モデル <ul style="list-style-type: none">✓ 楽しみと同時に食料を得る✓ 人気があり、身近なもの✓ ヨーロッパの中で狩猟者率が最も高い(1/20) 	中欧モデル <ul style="list-style-type: none">✓ 適度な(過剰な?)狩猟管理✓ 長い歴史と厳格なルール✓ 主に有蹄類の管理✓ 比較的狩猟者は少ない(1/300) 
アングロサクソンモデル <ul style="list-style-type: none">✓ スポーツ—紳士的態度✓ 道徳規範が高い?✓ プロによる狩猟管理✓ エリート主義者?(1/60)✓ 試験もテストも狩猟免許もない…問題? 	南欧モデル <ul style="list-style-type: none">✓ 社交行事✓ 種(の導入)よりも生息地に着目した管理✓ 広くいきわたっている(1/40) 

【出典】 欧米と日本の野生動物管理法制・しくみの比較 東京農工大学大学院農学研究院 梶 光一 作成
HPアドレス : <http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/yaseidobutu/pdf/shiryo2402-1.pdf>

⑫ 「ワイルドツーリズム」の提案②

◆ワイルドツーリズムが描く未来（目標）

「人間の生活世界」でのみ暮らしている人々が「野生の世界」に足を踏み入れ、その恵みを自ら手にすることに豊かさを見出すライフスタイルが浸透した社会。



⑫ 「ワイルドツーリズム」の提案②

◆ワイルドツーリズムが描く未来

「人間の生活世界」でのみ暮らす「野生の世界」に足を踏み入れ、自然の豊かさを発見するライフスタイルが浸透した社会。

「ヘビー層」ほどの技術や知識はないが、アウトドア感覚でハンティングをライフスタイルに取り込んだ人々。

ヘビー層



ホビーハンター



ライト層



⑬ ワイルドツーリズムプロジェクトに必要なこと

◆現在の主な問題は・・・

- ・ハンターは個別に行動。すべての作業を自力でこなし、収穫物の利活用も人によって差が大きい。
- ・猟友会等への伝手がないと、ハンターになるのも、その地域で狩猟するのも難しい。またどこでなら狩猟ができるか、狩猟について学べるのか等わからない。



野生の恵みを「獲得すること・活かすこと・学ぶこと」を統合し、支援するための「場」がない！

野生との共生の実践機能を集約した拠点の整備！

⑭ ワイルドツーリズムベース（WTB）の整備

★概略図

ワイルドツーリズムベース

バックアップ
機能

野生に触れる
・学ぶ場

実践機能を集約した複合施設

獣肉等引き取り・処理

ジビエレストラン

情報センター

送迎・
レンタル

野生と生活
のリンク

獣肉・
加工品販売

野生がテーマ
の展示

「ホビーハンター」のような、地域外からの来訪者や初心者でも快適に活動できるバックアップ機能（狩猟に係る情報の提供、獣肉等の回収・引き取り・処理等）を備える。

ハンター以外を対象に、野生の恵みとその活かし方を体験し、学ぶことのできる場を設け、より深い共生実践へと踏み込むきっかけを提供する。

⑮バックアップ機能の例

◆ホビーハンターでも気軽に狩猟できるように、ハンターの負担を軽減して快適な狩猟環境を提供。

★たとえば・・・獣肉利用のプロセスは次のとおり。



拠点はすべてのプロセスを一括して担える機能を有するとともに、各プロセスをバックアップ。

※猟区への案内、現場の状況についての情報提供、狩猟に係る安全指導、野生鳥獣の生体検査、獣肉の運搬（ジビエカー等の配備）、食肉処理加工、加熱・調理、保存等々。



【出典】一般社団法人日本ジビエ振興協会
HP:<http://www.gibier.or.jp/gibiercar/>

⑩野生に触れる・学ぶ場の例

◆人間の生活世界から野生の世界に一步踏み込める体験と学びの場を提供する。

- I その地域で狩猟・収穫されたジビエ等の料理の提供及び料理教室（解体教室！）
- II 山菜、獣肉、獣皮等を用いた加工品の販売及び加工の体験
- III 人間と野生の歴史・文化展示
- IV 野生動物のプチ動物園（生態展示）
- V 狩猟体験（ベースのバックアップ機能も体験してもらい、常連に！）



⑰地域の資源・既存の施設等を最大限に利用

◆拠点は廃校等の未使用施設を活用

たとえば、鮫川村なら…

鮫川村立青生野小学校が候補



◆地域の施設、業者とも連携

上記の施設を拠点とするなら…

●鹿角平観光牧場を地域外から訪問したハンター向けの冬キャンプ・バーベキュー場として開放。

●手まめ館、JA直売所での加工品販売。「みりよく満点物語」等レストランでのジビエ等を使った料理の提供。

●県南地域の食文化を活かした新商品開発（イノシシチャーシューなどいかが？）

⑰地域の資源・既存の施設等を最大限に利用

◆拠点は廃校等の未使用施設を活用

たとえば、鮫川村なら…

鮫川村立青生野小学校が候補



◆地域の施設、業者とも連携

上記の施設を拠点とするなら…

●鹿角平観光牧場を地域外から訪問したハンター向けの冬キャンプ・バーベキュー場として開放。

●手まめ館、JA直売所での加工品販売等レストランでのジビエ等を

●県南地域の食文化を活かした加工品（ソーメン、チャーシューなどいかが？）

地域の新たな産業振興へ！

⑱ ワイルドツーリズムが提案するライフスタイル [1]

◆ 東京都在住の「東京子」さん（30代・女性）の場合

☆ 「ジビエが食べたいな」と軽い気持ちで鮫川村の「青生野WTB」へ。それがきっかけで、最近、狩猟免許と第一種銃猟免許を取得した初心者ハンター。

☆ 普段はごく普通の事務員。特定の猟友会には属さず、週末に好みの地域へ足を運んで狩猟するホビーハンターの典型例。



ホビーハンター

⑱ ワイルドツーリズムが提案するライフスタイル [2]

◆ ある週末のこと・・・

今回は鮫川村で狩りをしよう！と思い立った京子さん。
首都圏から自動車に乗って「青生野WTB」へ！



朝は5時起き！
ちょっと眠いけど、
楽しみだな～

都心から鮫川村までは
車で2時間半くらい。
ちょっとしたドライブ
だね。



⑱ ワイルドツーリズムが提案するライフスタイル [3]

◆ 青生野WTBに到着！

まずはハンター受付で登録！

またお世話になります！

う～ん、そろそろハンティングにも慣れてきたし、今日は思い切って…



いつもありがとうございます！今回も初心者向けのインストラクター同伴コースに参加しますか？

かしこまりました！では登録証をどうぞ。GPS付きで、みなさまの位置を常に把握します。トラブルが起きたらボタンを押してください。

⑱ ワイルドツーリズムが提案するライフスタイル [3]

◆ 青生野WTBに到着！

まずはハンター受付で登録！

それじゃ…
A地区にします！



かしこまりました！
現地まで御案内しま
すね。お帰りの際は
御連絡ください。そ
れでは良い狩りを！



受付

検知センサーでの調
査では、最近ではA地
区にイノシシが集
まっていますよ。

今日はB地区に入っ
ているハンターさん
が多いですね。

C地区はちょっと遠
くて人気はいまいち
ですが、今日は快晴
ですし、穴場ですよ。

⑱ ワイルドツーリズムが提案するライフスタイル [4]

◆ 現地で探索しているとイノシシを発見！よ〜く狙って



⑱ ワイルドツーリズムが提案するライフスタイル [4]

◆ 現地で探索しているとイノシシを発見！よ〜く狙って

もしもし、青生野
WTBですか？
イノシシを狩ったの
ですが、運べなく
て・・・

かしこまりました！
ジビエカーを向かわ
せますので、少々お
待ちください！



やった！はじめて
ひとりで狩れた！

でも重くて運べない
し、解体のやり方も
わからないし、どう
しようかな・・・。
そうだ！

⑱ ワイルドツーリズムが提案するライフスタイル [4]

◆ 現地で探索しているとイノシシを発見！ よ〜く狙って

イノシシは狩れたし、今日はもう戻ろうかな



お待たせしました！
運搬と解体は私たち
にお任せください！



⑱ ワイルドツーリズムが提案するライフスタイル [5]

◆ 青生野WTBに戻ってきた京子さん

ローズとバラを
〇〇グラムくだ
さい。残りは売
却します。



かしこまりました！
解体した後に計量し
ますで、いましばらく
お待ちください。

受付

⑱ ワイルドツアーリズムが提案するライフスタイル [5]

◆ 青生野WTBに戻ってきた京子さん



ハンターのお姉ちゃん、かっこいいなあ。私もいつかハンターになりたいな！

あ、狩猟体験できるんだ！もっと大人になったら参加してみよう！



私が狩ったイノシシ、みんなに食べてもらえるんだ。なんだか嬉しいなあ。

⑱ ワイルドツーリズムが提案するライフスタイル [6]

◆ 青生野WTBの休憩所で他のハンターと一息ついていると…

やあみんな！ 鮫川村には鹿角平観光牧場っていうキャンプ場があるんだ。

ハンターなら温泉に無料で入浴できるし、今日狩ったジビエでバーベキューなんてどうかな？



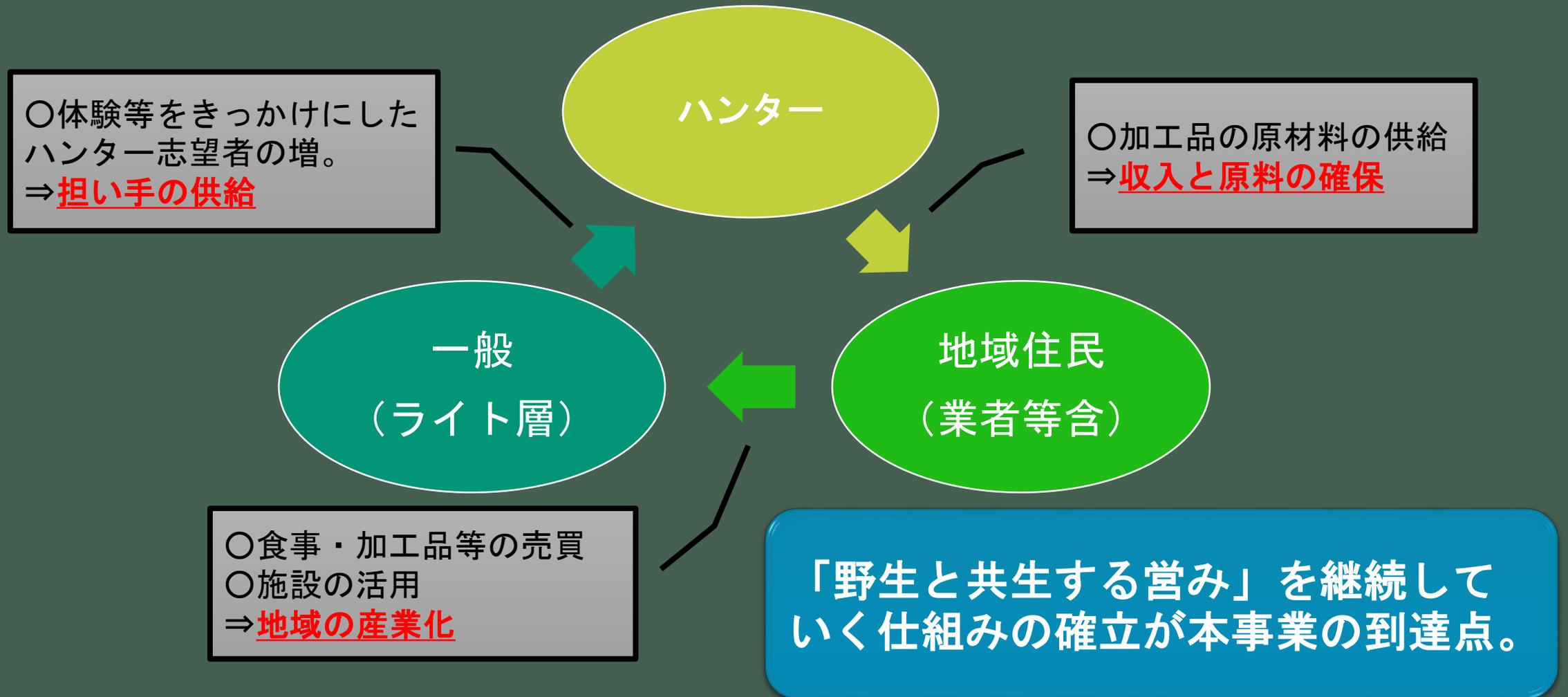
それなら、私のジビエ、提供しますよ！

⑱ ワイルドツーリズムが提案するライフスタイル [7]

◆ 温泉で一日のつかれを落とし、新鮮なジビエのバーベキューに舌鼓、そしてきれいな星空を眺めながら眠りにつく…。



①9 共生する営みを継続させる循環構造の形成



②行政機関が取り組むべきこと

◆非常に多岐にわたり、まだまだ検討を要する。

○拠点とする建物及び備えるべき施設・機能の選定

⇒事前の綿密な調査が必要。

○猟友会、地元業者、商工会等、協力者との調整・連携

⇒協議会の立ち上げを検討。

○狩猟に係る規制の緩和（ハードル・負担の軽減）

⇒銃規制等、重要な法律は国管轄。都道府県単位では、狩猟期間の延長・猟区の調整等が検討できるか。

○各種補助金の活用を検討

⇒「鳥獣被害防止総合対策交付金」等、被害対策を主眼としているため使いにくい面も…



②①最大の懸念は「放射性物質」！

◆イノシシ等の出荷制限解除の目処は立っていない…

しかし…震災前のイノシシ捕獲頭数は3,000頭なのに対し、平成30年度は10倍の30,000頭！
⇒本県でも狩猟拡大の機運は高まっている。

◆本県のジビエ処理施設数は0
まさに穴場！
ジビエも安全に食べられる真の復興に向けた準備を！



【出典】捕獲した鳥獣の食肉利用について（令和元年11月）
農林水産省農村振興局農村政策部鳥獣対策・農村環境課鳥獣対策室作成 HPアドレス：
<https://www.maff.go.jp/j/seisan/tyozyu/higai/attach/pdf/index-316.pdf>

おわりに

本プロジェクトは「いにしえのように野生と共生する暮らし」に回帰することを目指すものではありません。将来的に直面する様々な制約下において、現状の鳥獣被害への対応は継続困難であるため、別の道を探る必要がある、という問題意識から出発し、その参照点として、かつての人々の野生への「まなざし」に目を向けました。ここから、私たちが捨て去っていた価値を再発見し、これを基に新しい時代のライフスタイルを構築することで、地域の「問題」を「資源」に変えてしまおう、という試みです。

4. 施策提案書～心豊かな将来像の実現に向けて～

提案グループ A

<p>1. 施策名</p>	<p>集まれ！けんなん大家族！ ～県南地域の特色を活かし助け合う暮らし～</p>
<p>2. 提案目的</p>	<p>ヒト・モノ・カネが不足するであろう 2040 年の県南地域においても人々が心豊かに暮らせるよう、首都圏に近く製造業が多く立地する一方、豊かな自然にも恵まれている県南地域の魅力・特徴を生かし、ヒト・モノ・カネが不足していた昭和初期の“助け合う”暮らし方を参考とした、理想のライフスタイルを実現するための3つの施策を実施する。</p>
<p>3. 概要</p>	<p>1. Dream come true 県南 ～首都圏とのつながり～ 【概要】 首都圏で暮らす県南地区出身者を対象に県南地区の働く場等の情報提供や相互の繋がりを持つ場として「県南ふるさと会」を結成・運営を行う。また、県南地区にコワーキングスペースを整備し、県南出身者と地元企業との交流の場を設け地域のイノベーションに寄与する。 【得られる心の豊かさ】 首都圏へ若者が流出することはやむを得ない事ではあるが、首都圏にいても県南地区と繋がり続け、ふるさとを思い、いつでも戻って来られるような環境整備・情報提供を行い、ふるさとを離れても「行動に繋がる郷土愛」という心の豊かさを得て暮らすことができる。また、こういった取り組みから県南地区の交流人口を増加させることで、人々が行き交う賑やかで活気のある地区となり、地域住民にとっても心の豊かさを得て暮らすことができる。</p> <p>2. 森とともに生きる県南 ～自然とのつながり～ 【概要】 県南地区は山林を始め豊かな自然を有しているが、年々整備が行き届かなくなっている。山、川、海が繋がっているように、山に住む人、海に住む人が協力しお互いの環境整備を行う。環境保全活動の後には労をねぎらうイベントを開催し、楽しみながら互いの生活や仕事を知り交流することで新たなコミュニティを創出する。また、山林を教育の場に活用し、森林をより身近に感じてもらうことで、先人たちから受け継いだ山の恵を次の世代にも引き継ぐための切っても切れない関係を構築する。</p>

	<p>【得られる心の豊かさ】</p> <p>山に住む人、海に住む人が繋がりを持ち、相互の自然環境の豊かさを守り育むことで、「自然との共生」という心の豊かさを得て暮らすことができる。</p> <p>3. 生涯現役！県南地域の高齢者活躍創出 ～世代間のつながり～</p> <p>【概要】</p> <p>シニア世代を対象に資格取得や研修参加費用の補助を行い、県南地区でシニア世代に働き活躍してもらおう。企業の働き手の他、地域の子ども食堂の運営に加わってもらおう。行政は各種補助、子ども食堂の整備を行う。</p> <p>【得られる心の豊かさ】</p> <p>シニア世代が働く世代、子育て世代、子どもの世代と繋がりを持ち社会的役割を担うことで「生きがい」を得てもらおう。他の世代はシニア世代と繋がり、企業・子育て現場で活躍してもらおうことで「安心感」を感じ暮らすことができる。</p>
<p>4. 実施主体</p>	<p>1. Dream come true 県南 ～首都圏とのつながり～ 県・市町村</p> <p>2. 森とともに生きる県南 ～自然とのつながり～ 鮫川村・いわき市等（鮫川流域自治体）で相互の環境整備を行うモデル地区を構築する</p> <p>3. 生涯現役！県南地域の高齢者活躍創出 ～世代間のつながり～ 県・市町村 ハローワーク・シルバー人材センター</p>
<p>5. スケジュール (～2030)、 (～2040)</p>	<p>1. Dream come true 県南 ～首都圏とのつながり～ 2030年 コワーキングスペースの整備により、交流人口の活性化。 2040年 二地域居住や定住人口が増加。地元企業とのイノベーションにより、独自の新たな産業が創出される。</p> <p>2. 森とともに生きる県南 ～自然とのつながり～ 2030年 県南友好の森（鮫川村）モデル地区での植樹活動と浜地域（小名浜）での清掃活動を自治体と民間の協力によりイベントを開催。 2040年 持続可能な環境保全活動として他地域へ波及。</p> <p>3. 生涯現役！県南地域の高齢者活躍創出 ～世代間のつながり～ 2030年 資格・研修補助制度構築、子ども食堂へのシニア世代参加1か所 2040年 シニア人材データベース整備、子ども食堂へのシニア世代参加5か所</p>

<p>6. 予算概要</p>	<p>1. Dream come true 県南 ～首都圏とのつながり～ (支出) コワーキングスペース整備費用、県南ふるさと会運営費 (収入) コワーキングスペース賃借料、県南ふるさと会参加費</p> <p>2. 森とともに生きる県南 ～自然とのつながり～ 森林環境譲与税。ふるさと納税・企業版ふるさと納税等による民間からの支援。</p> <p>3. 生涯現役！県南地域の高齢者活躍創出 ～世代間のつながり～ 子ども食堂運営への寄附金、クラウドファンディング、ふるさと納税等を活用</p>
<p>7. 先進事例</p>	<p>1. Dream come true 県南 ～首都圏とのつながり～ ○神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックス https://www.in-kamiyama.jp/kvsoc/</p> <p>2. 森とともに生きる県南 ～自然とのつながり～ ○森は海の恋人運動 農林水産省 HP https://www.maff.go.jp/j/pr/aff/0906/spe1_05.html ○川場村のむらづくり 農林水産省 HP https://www.google.com/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=1&ved=2ahUKEwj2xrLwrl_oAhUhyosBHU45DXQQFjAAegQIAhAB&url=http%3A%2F%2Fwww.maff.go.jp%2Fj%2Fcouncil%2Fseisaku%2Fkikaku%2Fbukai%2FH26%2Fpdf%2F140730_02.pdf&usq=A0vVawORh80F-bZ7nFC2d1IG-7Bd</p> <p>3. 生涯現役！県南地域の高齢者活躍創出 ～世代間のつながり～ https://www.tokyo-np.co.jp/article/living/life/202001/CK2020012902000177.html 愛知県名古屋市 社会福祉法人フラワー園（高齢者デイサービスセンター） 施設が子ども食堂を運営、利用者が子どもに対して食文化を教える 埼玉県三芳町 社会福祉法人デイサービスけやきの家 利用者自らが子どもの食堂の買い出しと調理を行う</p>

提案グループ：グループB

1. 施策名	<p>県南地方版「ワイルド・ツーリズム・プロジェクト」 ～野生との分断から共生へ～</p>
2. 提案目的	<p>イノシシ及びシカ等、獣害をもたらす野生動物は近年急激に増加している。現在は鳥獣被害対策により被害を抑えているものの、対応する狩猟免許所持者（ハンター）は減少傾向にあるとともに高齢化が進んでおり、これを継続していくのは困難である。</p> <p>そこで、イノシシ等を「農作物等に害をもたらす厄介もの」ではなく「野生からの恵み」と捉え直し、野生との新たな共生のあり方を実践する「ワイルド・ツーリズム」を提唱して、狩猟等の野生の恵みを獲得する営みへ参入する人々を支援することで、野生動物を害獣から地域の豊かな資源へと転換し、人間と野生との新しい関係性を構築する。</p>
3. 概要	<p>ワイルド・ツーリズムは、現在ごく限られた者しか実践できていない野生との共生を、より一般的なライフスタイルとして浸透させ、野生の恵みを人間の生活に活かす社会を目標としている。</p> <p>この共生実践の主軸を担うハンターは、ハンターになるにも狩猟をするにも、狩猟に縁がない一般市民にはハードルが高い（猟友会に知り合いがいる等、特定の人脈がないと参入が難しい）という問題を抱えている。そこで、狩猟をバックアップする機能を備えた拠点「ワイルド・ツーリズム・ベース（WTB）」を整備し、特別な人脈等がなくても、その地域においてアウトドア感覚で狩猟ができる場とする。また、ハンター以外の方でも野生の恵みの活かし方を体験できる場をつくり、野生との共生実践に参加するきっかけを提供する。</p> <p>【WTBの機能例】</p> <p>①ハンター向け</p> <p>狩猟に関する情報センター、休憩所、獣肉の買い取り、初心者向け狩猟インストラクター、ジビエカーの派遣及び現場までの送迎等などの機能を備え、これまでハンターがひとりで行っていた作業もベースがバックアップすることで、狩猟に係るハンターの負担を軽減する。</p> <p>②ハンター以外の一般市民向け</p> <p>獣肉を用いたレストラン、獣皮で作成した加工品の販売及び野生動物の生態展示、狩猟体験等を行い、日常生活のなかでは機会の少ない狩猟及び野生の世界に触れてもらい、狩猟への興味と知識を培ってもらうとともに「ここに来れば安心して狩猟ができる」と実感してもらう。</p>
4. 実施主体	<p>○行政（市町村レベルを想定）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ WTB となる施設の整備及び運営（廃校等、既存の施設を利用して経費抑制）。 ・ 各実施主体間の調整。 ・ 協議会事務局。 ・ 狩猟に係る法規制の緩和又は簡略化（狩猟期間の延長等も考えられるが、それは県の

	<p>所管)、あるいは現行の法規制に煩わされることが少なくなるような仕組みの構築(狩猟区や対象鳥獣の情報提供等)。</p> <p>○猟友会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・拠点整備時の助言(どのような設備があれば狩猟しやすくなるか等)。 ・狩猟体験の講師(すでに取り組んでいる団体等から助言を受けつつ、将来的には地元のハンターが担えるようにする)。 <p>○地元住民及び業者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・拠点の従業員として勤務。獣肉、獣皮及び山菜等を用いた加工品の製作・販売。 ・獣肉等を用いた特産品の開発(イノシシチャーシュー等)。 <p>○その他、ジビエ料理人、大学等研究機関、狩猟に係る事業を展開している民間業者等。</p>
5. スケジュール (~2030)、 (~2040)	<p>○~2030</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域内の狩猟に係る実態調査。 ・プロジェクトを推進する協議会(行政、猟友会、商工会、研究機関等)の立ち上げ。 ・猟友会等から施設の内容(必要な設備、サービス等)に係るヒアリングの実施。 ・拠点の選定及び整備。 ・野生動物の放射性物質検査。 <p>○~2040</p> <ul style="list-style-type: none"> ・拠点の運営開始。
6. 予算概要	<p>※規模が大きくなると想定されるものをピックアップ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「WTB」拠点整備事業(拠点となる建物の改修等) ・狩猟バックアップ設備整備事業(ジビエカー等、拠点に付属しない設備の購入等) ・「WTB」活動支援事業(施設運営の委託料、猟友会への報償金等)
7. 先進事例	<p>○農林水産省「鳥獣被害の現状と対策 平成30年6月7日」※基本情報として https://www.maff.go.jp/j/seisan/tyozyu/higai/h_kensyu/attach/pdf/30_tsukuba_kensyu-6.pdf</p> <p>○農林水産省「ジビエ利用モデル地区」 https://www.maff.go.jp/j/press/nousin/tyozyu/attach/pdf/180309-1.pdf</p> <p>○株式会社源「ジビエを味わう、狩猟体験ツアー2020」 https://ko-kosuge.jp/hunters2020/</p> <p>○京都府農林商工部企画調整室「狩猟体験イベント 丹後獣害へらし隊『ハントランス』」 https://www.pref.kyoto.jp/t-no-kikaku/hantoransu.html</p> <p>※「狩猟のバックアップ機能を備えた拠点を整備する」という試みは、先行事例として特に見当たらなかった。</p>
8. その他	<p>最大の問題は、野生動物及び山菜に含まれる放射能濃度が今後どう推移するか。ただ、いずれ線量は下がる。野生を資源とする方策を今から練っておくのは有用と考えられる。</p>

5. 研究会活動経過

(1) 研究会の概要

政策研究会では、各研究員の政策形成能力の向上のため、前半に「バックキャスト思考」という新たな思考法を学ぶための知識を深める取組みを行い、後半に課題解決のための施策の提案を行うための取組みを行いました。

令和元年度は、6月から1月まで7回の研究会を開催しました。

以下はその活動経過です。

【第1回政策研究会】

日 時：令和元年6月13日（木）12:30～16:30

場 所：福島県白河合同庁舎 大会議室

12:30～13:00 オリエンテーション

13:10～13:20 センター所長あいさつ、県南地方振興局長からの激励

13:20～14:40 基調講演

東京都市大学環境学部教授 古川 柳蔵氏

「バックキャスト思考で政策を提案するには」

14:40～14:45 質疑応答

14:50～16:30 体験ワークショップ

【基調講演】



従来の思考法とバックキャスト思考の違いなどについて御講演いただきました。

○講演内容

- ・ 厳しい環境制約を受ける未来では、部分最適ではなく、全体最適を考えてライフスタイルをデザインしていくことが心豊かな暮らしを実現していくことになる。
- ・ 全体最適を考えた新しいライフスタイルを生み出すためにはバックキャストという方法を使う。
- ・ バックキャストの手順は、「2040年の制約（問題）を考えて、現在のライフスタイルをみる。現在をみたとき、今の暮らしを維持することはできないという問題が見えてくるので、その問題を解決するための未来を描く。そのときに、単純に我慢削減ではなく、制約を受け入れたからこそ生み出される価値を入れた心豊かな未来を描いていく。次にその未来を実現するためには、2030年はどうなっていないかならなければならないのか、段階的に描いていく。そして、現実に戻った時、その中間のライフスタイルを実現するために必要な政策は何か。また、その先の10年で必要な政策は何かを考えていく。」というもの。

【体験ワークショップ（講義・演習）】



○体験ワークショップ内容

- ・ 古川教授より、バックキャスト思考について、事例を交えた講義を受けた後、

各グループで社会状況についてディスカッション、将来の問題の抽出。

【第2回政策研究会】

日時：令和元年7月16日（火）10:50～16:30

場所：大信農村環境改善センター（白河市大信庁舎内）

10:50～11:10 全体ミーティング

11:15～14:00 古川教授によるライフスタイル解説及び90歳ヒアリング
のノウハウの講義

14:00～16:00 90歳ヒアリング

16:00～16:15 振り返り、課題について

16:15～16:30 次回研究会に向けて

【90歳ヒアリング】

「90歳ヒアリング」とは、東京都市大学環境学部古川柳蔵研究室で、研究の一環として行っている手法で、90歳前後（戦前の暮らしを体験された方）の高齢者の方々に直接お話を聞かせていただき、戦前の暮らしについて分析し、その中から忘れ去りつつある暮らしの知恵や感性、地域に伝承されている地域らしさを再発見し、未来の暮らし方にその仕組みを活かしていくものです。



○ヒアリング内容

◇食事について

- ・ ご飯は麦ごはん、調理は薪を焚いて。麦は家の畑で作ったもの。
- ・ 魚は行商人から食べる量だけ買っていた。保存する冷蔵庫がないため。
- ・ 野菜は白菜、ネギ、ジャガイモ。漬物や煮物で。
- ・ 味噌は家で作っていた。
- ・ 飲み水は井戸。

◇おやつについて

- ・おにぎり。味噌をつけたものや、麦ごはんで。漬物。
- ・お菓子（甘いもの）は買えなかった。干し柿くらい。

◇遊びについて

- ・夏は川で水浴び、魚採り。
- ・田んぼでドジョウを獲ったり、蛍採りもした。今と変わらないのは、カブトムシやクワガタ採り。
- ・冬は竹スケートやスキーを自分で作って滑っていた。あとはカルタとり。
- ・女の子は小豆を入れたお手玉や、バタ（竹を薄く切ったもの）。

◇家の仕事（手伝い）について

- ・農家の手伝い。田んぼの雑草取り。田植えの靴は無いので裸足で。泣き泣きやった。田植え前に馬を使って田んぼの土を柔らかくする鼻とりもした。
- ・蚕。繭が一番の収入源だった。田んぼが終わると蚕。年4回～6回くらい。

◇交通手段について

- ・乗り物がないので、三里でも四里でも歩き。道路は舗装も無くてでこぼこ。大信地区から白河市へも歩きだった。（10kmくらい）
- ・夜は提灯を持って歩いた。戦前はタクシーもあったが、戦後はバス。

今回は、白河市大信地区に暮らすお二人の方から、昔の暮らしについて大変貴重なお話をお伺いすることができ、研究員はメモを取りながら熱心に聞き入っていました。

【第3回政策研究会】

日 時：令和元年8月20日（火）10:50～16:10

場 所：福島県白河合同庁舎 303会議室

10:50～11:10 全体ミーティング

11:00～12:00 「新たな自治体行政の考え方」、「政策体系について」の講義

13:00～14:00 事例説明

14:00～15:00 政策体系図（フィッシュボーン）の作成

15:00～16:00 グループのライフスタイルデザイン

16:00～16:10 次回研究会に向けて

【政策体系演習】

当センター総括支援アドバイザーが講師となり、テーマの背景にある「新たな自治体行政の考え方」、「政策体系とは何か」について講義を行った後、第2回研究会で行った県南版「90歳ヒアリング」の内容を活かした各研究員が描く「心豊かな暮らし」を基に政策体系図の作成を行いました。



政策体系図を作成後、ポスターセッション方式で発表を行いました。

【第4回政策研究会】

日時：令和元年9月20日（金）10:50～16:10

場所：福島県白河合同庁舎 303会議室

10:50～11:00 全体ミーティング

11:00～12:00 グループ演習

・第3回の振り返り、ライフスタイルデザイン

13:00～16:00 古川教授による講義、演習

16:00～16:10 次回研究会に向けて

【ライフスタイルデザイン、システム図作成】

研究会の活動が折り返しとなりました。これまでの活動を振り返った後、第1回、第2回研究会に引き続き、古川教授をお招きし、講義、演習に取り組みました。各グループが描く心豊かな将来像(ライフスタイル)を実現するには、社会はどのようなシステムで動いているか、「システム図」に表しました。システムの概要を考えていくと、必要な政策が見えてくるというものです。



各グループでシステム図を作成後、発表を行い、古川教授よりコメントをいただきました。

【第5回政策研究会】

日 時：令和元 11 月 19 日（火）10:00～16:10

場 所：福島県白河合同庁舎 303 会議室

10:00～10:15 全体ミーティング

10:15～10:30 第4回課題への事務局コメント

10:30～11:00 第4回課題のグループ内共有

11:00～12:00 各グループの心豊かな将来像（コンセプト）についての議論

13:00～16:00 各グループの心豊かな将来像（コンセプト）の決定

16:00～16:10 次回研究会に向けて

【政策提言に向けたグループ活動】

第4回政策研究会までは知識を深めるための学びの活動を中心に活動を行いました。第5回政策研究会からは、研究員が描く心豊かな将来像を実現するためには、「どのような政策が必要か」、「行政はどうあるべきなのか」、を実際に検討していく活動に入りました。

当初、10月の開催を予定しておりましたが、県内にも大きな被害をもたら

した台風 19 号の影響により、活動を 1 ヶ月延期しての開催となりました。

研究会では、第 4 回の課題として取り組んだ「現状把握」についてグループ内で共有し、その後、新しい価値、県南らしさを持った心豊かな将来像（コンセプト）について議論し、それを実現するためのシステムはどういうものかを考えました。システムの概要を考えていくと、必要な政策が見えてきました。



【第 6 回政策研究会】

日 時：令和元年 12 月 10 日（火）10:00～16:10（Bグループ）

令和元年 12 月 11 日（水）10:00～16:10（Aグループ）

場 所：福島県白河合同庁舎 303 会議室（Bグループ）

白河市産業プラザ 人材育成センター（Aグループ）

10:00～10:15 全体ミーティング

10:15～10:45 施策提案書の作成、提言（発表）方法について（講義）

10:45～12:00 第 5 回課題（システム図）の共有、必要施策の議論、先進事例紹介

13:00～16:00 必要施策議論、施策提案書の作成

16:00～16:10 次回研究会に向けて

【政策提言に向けたグループ活動】

研究員の日程都合により、グループごとに開催しました。
報告会に向け、提言する施策について議論を重ねました。



【第7回政策研究会】

日 時：令和2年1月9日（木）10:00～16:10

場 所：白河市立図書館地域交流会議室

10:00～10:10 全体ミーティング

10:10～12:00 発表資料のグループ内共有、資料仕上げ、発表準備

13:00～15:00 報告会に向けた発表練習、意見交換

15:00～16:00 事務局による発表への助言、各グループでの資料修正

16:00～16:10 次回研究会に向けて

【政策提言に向けたグループ活動】

報告会に向けて、発表資料の準備、発表練習を行った後、お互いのグループ発表を聞き、アドバイスや意見交換を行いました。



【政策研究会報告会】

日 時：令和2年2月7日（金）13:00～16:30

場 所：白河市立図書館地域交流会議室（中会議室）

参加者数：48名

13:00 開会

- ・主催者あいさつ
- ・来賓あいさつ

13:15～14:20 第1部 研究成果発表

14:20～14:30 第2部 意見交換

「県南らしい地域づくりの在り方を考える」

コーディネーター：ふくしま自治研修センター 奥原 英彦

参加者：

東京都市大学教授	古川 柳蔵 氏
福島県県南地方振興局長	安達 豪希 氏
白河市副市長	圓谷 光昭 氏
西郷村副村長	東宮 清章 氏
鮫川村長	関根 政雄 氏
福島県南会津農林事務所農業振興普及部副部長	藤原 かおり 氏

16:30 閉会

【第1部：成果発表】

各グループより、成果発表を行いました。Aグループは『「集まれ！けんなん大家族！」～県南地域の特色を活かし助け合う暮らし～』、Bグループは『【県南地方版】ワイルド・ツーリズム・プロジェクト～野生との分断から共生へ～』と題し、研究成果を発表しました。



【第2部：意見交換】

はじめに、古川教授から「バックキャスト思考」について、研究会で御指導いただいたポイント等についてお話をいただきました。

古川教授からのお話のあと、御出席いただいた来賓の方々から発表への講評をいただき、以下の4つの論点から「県南らしい地域づくりの在り方を考える」をテーマに意見交換を行いました。

- ・「厳しい制約条件（2040年の未来）における「心豊かなライフスタイル」の実現について。
- ・「県南らしさ」を活かした取組について。
- ・「広域的な自治体連携の必要性」について。
- ・「これからの行政の在り方」について。



○古川教授からお話をいただいた内容

(バックキャスト)

・未来のことを考えるには、地球環境のことを抜きにはできない。2050年にはCO2排出をほぼ実質ゼロにしなければならないと世界的にいられている。CO2が出せないということは、今我々が得ている便利なもの、便利な暮らしというものができないことだらけになる。

その中でも、我々は未来をつくっていかなければならない。その時に、今の延長線上に未来を描くと、おそらく答えはないといわれている。でも答えを導き出さなければならない。そこで考え出されたのが「バックキャスト思考」。

もとは、イギリスで考えられた手法。1970年代イギリスで、資源が枯渇するといわれたときに研究者が考えた。将来の資源が有限であることを前提として、現在をみる。これがバックキャストの語源。

(バックキャストの手順)

・現在のライフスタイルをみると、将来このまま維持できそうにない問題が

見つかる。この問題を解決するライフスタイルを描く。描いたライフスタイルには、この制約を受け入れたからこそ得られる価値というものを入れる。そうすると、単純に昔の暮らしに戻るのではなく、新しい未来が描ける。

・2040 のライフスタイルに向かうためにはどうしたらいいかを考える。未来のライフスタイルは、今の便利な依存している暮らしとは違い、ある程度自立した暮らしにならざるを得ない。そこに行くためには2030年にはどうなっていなければならないか、現在はどうかということを考え、必要な政策を考え、最終的にゴールに達する。ロードマップをつくることで、ようやく実現できる。これがバックキャストという方法。

(心の豊かさ)

・心の豊かさは制約の中の豊かさ。制約があるところだからこそ、楽しめることがある。ゲームはルールがあるから面白い。ルールという制約があるうえでの心豊かさ、そういう世界がたくさんある。今回の研究会で「90歳ヒアリング」に取り組んだが、実はそういう心の豊かさは戦前の暮らしに多かった。それを学ぶために研究会で取り入れた。

(他の自治体の事例)

・兵庫県豊岡市。豊岡の食材を使った地産地消のライフスタイル「旬を楽しむ会」の事例。地元給食で地元食材を利用するため、考えられたのが「雪室」を使った野菜の保存。それが、今では野菜だけでなく、そば、日本酒まで広がった。「雪室」という今まで価値がなかったものに価値が得られた。出石市では、ほとんど「雪室そば」。

雪室だけでなく、いろんな地域でテーマを変えて、展開し、広がっていく。

豊岡市の取組は、2013年に始めて今も継続している。

(まとめ)

・豊岡の事例のように、バックキャスト思考を使った活動は、行政だけでなく、民間とか企業を交えて連動させていくと長く継続し、活気が出てきて自走し始める。自走し始めると、次のプロジェクトに進んだり、アイデアが出てくる。地域に根づいた考え方がでてくるので、うまくいく。

これをフォーキャスト思考、従来型の思考法で進めると、こういう展開にはならない。やはり、バックキャスト、制約というものをいったん受け入れて、そのうえで、ポジティブに捉え直して新しいアイデアを出すと、必ず地域の概念になる。

(発表への講評)

・戦前の暮らしから今を比べると、昔は自然が強かったので、コミュニティが必要だった。コミュニティで助け合って、個人が成り立っていた。それが便利なものが導入されて、コミュニティが不要となり、個人で生きていけるようになった。それにより、コミュニティが消えて、自然が遠ざかった。

Aグループは、特にこのあたりを焦点にしている。離れていったものをつなげる。これは、自然とつながっていくのではなく、政策で背中を押してあげて、もう一度元に戻してあげるといった提案だった。

・Bグループの方法は、ジビエの話だが、大事な点を指摘してくれている。自然から離れていった、ただ距離が離れていったのではなくて、自然の捉え方が変わってきたという話。捉え方が離れていくと、簡単には近づけない。昔の状態に戻るには、信頼関係が必要で、ある程度のリスクを負わなければならない。これをどう超えていくのか。そこを考えない限り、自然は我々の暮らしには近づいてこない。Bグループはそこを超えようとしている。観光客が猟師になっていく。そのプロセスをちゃんと階段を作って上っていけるようにしているところが特徴。

○意見交換の中でいただいた御意見

・Aグループ、Bグループ、それぞれアプローチは全く違っていた。Aグループは、制約を前提とした中で、行政は何をすべきかということをおソックスに提言。中身を詰めれば、今すぐにでも事業化したいなというような話が聞けた。一方、Bグループは、好ましくない状況、制約をのものを活かそうという想像もしていなかったような大胆なアプローチであった。ポジティブの極み。

A、Bグループいずれも県南地域の特色、いわゆる「県南らしさ」というものをしっかり把握し、研究に取り組みされた。まさに地域の特色というものをしっかり把握する。それが行政がアイデアをひねり出す源泉。

・広域なテーマとしているので、問題の吸い上げやどう構築するか大変だただらうと思う。特に県の立場として、地域をどうするんだといったときに、そういう目は必要、研究員は非常に勉強になったと思う。人とのつながり、地域とのつながりを大事にして、今後に活かしてほしい。

・Aグループの発表に首都圏とのつながりという提言があったが、白河市の例をとると、新幹線で最速70分と首都圏に非常に近い。逆に近いということで、首都圏の大学に進学して若者が流出してしまう。厳しい未来を想定してという話があったが、矢祭町出身の若者が東京に行った大学生など、若者に戻ってきてもらう取り組みをやっている。喫茶店、宿泊施設をつくり、気

軽に地元にも、県南に帰ってきてもらおうという試みも始めたところ。

・県南地方は、広域行政の考え方、消防、し尿処理、下水道、滞納整理について、連携して運営している。今後もこのシステムはずっと続けていかなければならない。今回の提言の中にも広域で一緒に考えようということで、的を得ていたと思う。

・今の経済システムの中ではうまくいかない、だけど、昔は価値があって使われていたものは結構いっぱいある。そういうのは地域ごとにもっと出てくる。

・自治体戦略 2040 構想研究会の報告のなかで、県と市町村というものをどう持っていくのかといういわゆる二層制について出されている。都道府県と市町村の二層制を柔軟化するということで、押し付けでなく、一緒にあるべき姿を共に考えていければよい。

・行政が自治体のすべてのことをやるのは不可能。地域が連携してやろうと、定住自立圏の取組がある。白河市が中心となり、県南地域で様々な取組みをやっている。また、県を跨いだ取組も行っている。

・少子高齢化ということもあり、地域住民が地域に関心を持たない、持てないということで問題が生じている。片や住民のニーズは多様化している。職員だけで住民の要望をすべて賄うのは到底できない。地域の人に手伝ってもらわなければならないということで、協働活動を行う団体を対象に補助し、交流を深めたり、地域の絆をつくることで、最終的には自主防衛組織という形に結び付けていこうと考えている。役場も丸投げではなく、役場職員も地域に入って一緒につくっていこうと。これからの行政の役割だと思っている。

・一つの村、一つの町でできないことは、広域的に行っていく必要がある。どうやって経費を削減するか。

・人材育成が大切。

・行政としてやってもらいたいことは、

1 ビジョンを示す

ビジョンを示すのは行政。バックキャストで未来の暮らしの骨格を、大事なコンセプトを発信する必要がある。

2 人づくり

3 広域での取組み

広域はイノベーションのチャンス。

4 限界を超える前に

地域によって、限界を超えているところがある。活動する人がいない、など。限界を超える手前で、限界を超えない範囲でライフスタイルの見

直しをやったほうがよい。

5 温かい目で見守る

今後、誰も経験したことのない社会がくると思われる。試行錯誤で最適化を探るしかない。温かい目がないと持続しない。地域活動を見守ってほしい。



報告会終了後、研究員、古川教授、センター職員にて

編集・発行

令和2年3月

ふくしま自治研修センター

令和元年度 方部出張型政策研究会

Tel 024(563)7283 Email:shien@f-jichiken.or.jp